～希少がんを知り・学び・集うセミナー！～

希少がん　Meet the Expert

第 5 回 「胚細胞腫瘍」開催レポート

初夏の日差しを感じつつある 5 月 12 日(金)、国立がん研究センター希少がんセンターにて「希少がん Meet the Expert」の第 5 回目が行われました（共催：がん情報サイト「オンコロ」、認定 NPO 法人キャンサーネットジャパン)。今回のテーマは「胚細胞腫瘍」。同センター乳腺・腫瘍内科・下井辰徳先生の講演を中心に、活気あるセミナーとなりました。司会は希少がんホットライン担当看護師・加藤陽子さんです。

胚細胞腫瘍は、日本において 10 万人に 1～2 人の割合で発生している希少がんです。今回の講演では、胚細胞腫瘍の中でも最も多い精巣胚細胞腫瘍を主に、卵巣胚細胞腫瘍、頭蓋内胚細胞腫瘍の診断方法、現在の治療法、そして今後期待される治療法についての解説がありました。

『精巣胚細胞腫瘍は根治を望めることが多く、病気の状況が腫瘍マーカーに表れやすいがんです。治療は化学療法を主軸とし、補助的治療として手術が行われます。現在の標準治療としては BEP 療法(ブレオマイシン・エトポシド・シスプラチンの併用)が用いられていますが、より毒性の低い治療の研究もされており、分子標的薬・免疫チェックポイント阻害剤といった新しい薬剤も期待されています。

そして、卵巣がんは 60 代でかかることが多い反面、卵巣胚細胞腫瘍はほとんどの場合 30 歳までの若年に発生するのが特徴です。手術後の化学療法(BEP 療法)が標準的な治療となっています。精巣・卵巣胚細胞腫瘍とも妊孕性温存などの問題があり、治療後にもフォローが求められます』(下井先生)。

また、『頭蓋内胚細胞腫瘍は 15 歳未満の小児に多いものの、限局期や

髄膜播種ではかなり治る率が高い』とのお話でした。

続いてのQ&Aは、下井先生と加藤さんに、「精巣腫瘍癌患者友の会 J-TAG」の改發厚さん、解説としてオンコロ・コンテンツ・マネージャーの柳澤昭浩さん、同じくオンコロの可知健太さんが加わって行われました。質問は、精巣腫瘍に対する本人や家族の悩み、就労・就学問題、妊孕性、難治性がんの治験についてなど。下井先生は「胚細胞腫瘍は“家系”ではなく、偶然なってしまうもの」であること、改發さんからは「精巣腫瘍は本人から相談をしにくい病気。家族は自分を責めてしまうこともあるが、誰のせいでもない」とお話されました。また、就労の問題については、「未だ社会では、がんが死につながるイメージがある。がんになったとしても働いていけることを、がんを経験した人たちが社会に投げかけてもらいたい」とお話があり、「がん患者が自ら社会を変えていくことの大切さ」が伝わってきました。

参加者からは、「非常に専門的に細かく説明いただいたため理解できた」「講演後のQ&Aもよかった」という声がありました。下井先生は講演中に「難しすぎないですか？」と来場者に問いかけ、セミナー終了後には個々の質問に丁寧に対応するなど、患者さんのそばに立ってくれている医師であることをうかがわせました。不安を抱える希少がんの患者さんや家族にとって心温まるセミナーとなったのではないでしょうか。（詳しくは動画をご覧ください）

（開催日：2017年5月12日／写真・文　木口マリ）

【共催】

国立がん研究センター希少がんセンター/がん情報サイト「オンコロ」/認定NPO法人キャンサーネットジャパン

【後援・運営協力】

株式会社かるてぽすと/樋口宗孝がん研究基金/株式会社クリニカル・トライアル/株式会社クロエ